

伊能図探究

— 現存する伊能図を尋ねて —

NO 4

平成7年6月1日

伊能日本図探究会

フランスにあった伊能図 特別号

フランスにあった伊能中図

伊能日本図探究会代表 渡 辺 一 郎



フランスで発見された伊能図（日経夕刊で91年2月既報）について、95年3月27・28日の2日間研究者として始めて実見調査をおこなった。パリ近郊に住む仏人イブ・ペイレ氏（国立高等農業学校教授、土壌学専攻、科学博士）所有の伊能図は、文政4年の最終版伊能中図八枚の完全揃であった。針穴が明瞭に認識される突手本で、かつ完成度は極めて高い。保存良好で、虫食い、汚れ、退色は全く無い。全体の感じと、彩色の濃度は成田中図によく似ており、同系統の図ではないかと考えられる。

残念ながら、発見時の手違いで、九州南部について一部破損があるが、原型回復は容易である。フランスにあると報ぜられた伊能図は、最高レベルの最終版（文政4年上呈）中図副本であることを確認した。

通訳の荒井潔君（パリ大学在学中、早大仏文科卒）に同行願い、入手の経過について細かく質問した。奥さんのニコル・ペイレさんがブルゴーニュにある古い家を母から生前相続した。約20年前に同家の改装のため屋根裏を整理した際に見つかった。この家は、母が祖母から1/3を相続し、弟達から2/3を買取ったもので、祖父は蹄鉄工だった。母はこの図のことを知らない。祖父の前の所有者は獣医で、その前は公証人だった。重要書類を保管する部屋の窓には鉄格子があったという。二棟あり主棟の建築は門扉の記録によると1848年とのこと。これ以上のことは判らず、現物にも手掛りになる痕跡は何もない。

幕末にフランス軍人が幕府に招聘されていたから、軍人との関係を尋ねたが前記以上のことは分からなかった。地図のコンパスローゼ（接合記号）の線で強く折り曲げられた跡があり、イブ氏は幕末から明治期に開かれたパリ万博に展示されたのではないかと推理している。接合展示するには万博でなくとも接合記号の線で折り曲げる必要があり、にわかに信じ難いが、目下仮説の立てようがない状態にある。

目 次

フランスの伊能中図の概要	2
図1 (仏) ペイレ中図 中部 全図	3
図2 (仏) ペイレ中図 部分図 淡路島	4
図3 (仏) ペイレ中図 と東博中図・成田中図比較	5
伊能中図の発見	6
フランスの伊能図撮影紀行	7
イブ・ペイレ Yves Peyre 氏1家の横顔	8
忠敬のナゾに挑む（朝日新聞記事）	8
編集後記	8

フランスの伊能中図の概要

1. 全体の構成、状態

8枚の地図の構成は次のとおりで、東博中図、成田中図、日本学士院中図（明治期に伊能家副本より研究目的で複製）等と比較して描図範囲、用紙の寸法はほぼ等しい。

		(縦)	(横)			(縦)	(横)
中図第一	北海道東部	195cm	×158cm	中図第五	中部・畿内	248	×158
中図第二	北海道西部	252	×158	中図第六	中国・四国	234	×159
中図第三	奥州	225	×158	中図第七	九州北部	177	×159
中図第四	関東	281	×158	中図第八	九州南部	168	×159

各図共裏打ちして巻かれている。中図第何の名称は、裏側の巻き終わりに縦書きで墨書する中図に共通な形式である。軸装はない。原図から測線を写しとるための針穴は明瞭に認識できる。全8枚について数ヶ所づつ拡大鏡で抜き取りチェックしたが、8図共針穴は明瞭に存在する。各図の描図範囲は成田中図、東博中図に等しい。発見時には全部を重ね巻きし紙に包んであったという。約20年前にブルゴーニュで取得した民家の屋根裏を整理して発見したが、はじめ大したものではないと思い、第八図（南九州）を破いてしまったとのこと。南九州は途中まで縦に2つに裂かれており、周辺も破れている。破片は残っているので修復には支障ない。発見からこれまでに開いた回数は多分5～6回で、多くとも10回を超えることはない。開いても部分的で、今回のようにすべてを開いて撮影し、各部を拡大鏡で調べたことはないとのこと。破損は南九州以外にはない。秘図だったためか経年変化によるシワ、退色は殆んどない。汚れも見付けることが出来なかった。

2. 描 図

(1) 標題、凡例、表示、記号

他の伊能中図と同様で、標題、識語、凡例などは一切ない。たゞ、図中の記号、表示は他の中図と同様である。

測線は朱、山岳は緑、河川、湖沼、海岸は水色、砂浜は黄色で描き、駅町○、城下□、天測点☆、国界|、郡界●、神祠△、寺院△、港湾△、などを表す。

朱の方位線が著名な目標に走り、隣接図との接合記号はコンパスローゼを他の中図と同様な位置に配する。

(2) 墨・朱色

丁寧度の尺度として、墨と朱があげられる。朱は年代の決定にも役立つが、筆者は知識を持ち合わせない。他日を期したい。

(3) 彩色の濃淡

東博中図に比し淡彩である。成田中図とはほぼ同レベルである。

(4) 描 図

丁寧な描図と考える。表示記号の捺印は鮮明である。

(5) 文 字

東博中図と同等又は以上の達筆と考えられる。

3. 記入内容の精粗

図中に書込まれている記入項目について簡単な比較を試みた。

(1) 江戸から始まる街道の比較

日光街道、中山道、川越街道について、それぞれ栗橋、吹上、川越迄の沿道の村落、河川、駅町、城下、郡界、天測地点の記入状況を東博中図（武揚堂版）と対比した。

村落、駅町名の記入位置が測線に対し左右反対側にあたり、記入方向が逆向きになっているものがあるが村落駅町名の脱落はなかった。小河川、城下、郡界、国界も一致している。天測位置を示す☆印は東博中図では見当たらないが、フランス中図には草加、粕壁、樋川、川越、等9ヶ所に記入がある。他に東博中図では川越の駅町を示す○印がなかった。

(2) 富士山周辺の比較

富士山の周囲から伊豆付近について、同様対比した。

村落、駅町の名称は記入方向、記入位置の違いはあるが脱落はほとんどない。東博中図では天測地の☆の記号がない。（小田原、沼津）。東博中図はもともと天測地を書いてないのかも知れない。箱根裏街道の矢倉沢付近にある郡界表示はフランス中図にはあるが、東博中図にはない。

フランス中図は富士山の直南、直北、および伊豆半島頸部に経緯線の記入があるが、東博中図には描かれていない。（この経緯線は成田中図および学士院中図には記入されている）

(3) 淡路島全域の比較

東博中図と比較して村落名の違いはない。東海岸の多賀村がフランス中図では2ヶ所に現われ、東博中図では1ヶ所しかないが、場所は接近して直交する地点であり、正否は決められない。地名の記入位置はフランス中図は主として海岸の海側にあるのに対し、東博中図では約40ヶ所か陸地側に記入している。

東博中図には天測地点の記入が1つもないが、フランス中図では10ヶ所に記入されている。北東岸の慶野村付近にフランス中図は郡界の印があるが、東博中図にはない。反面、西南岸の小山の愛宕山と月之山は東博中図にはあるがフランス中図にはない。中央の千光寺山への方位線は両図共14本である。

(4) 宍道湖周辺の比較

図3は宍道湖周辺のフランス中図である。宍道湖は当時は完道湖と書いたらしい。東博中図と仏の中図の完道湖の文字は西を先頭とし、成田中図は東を先頭とする。図3の鎖線の範囲で3種の中図の異同を対比した。

仏の中図と対比して、東博中図、成田中図に共通して書かれてない部分を○印で囲んだ。天測箇所4ヶ所、神祠8ヶ所、郡界1ヶ所である。逆に仏中図の洩れは村名1ヶ所、沖の小島の名称2ヶ所、小山の名称2ヶ所であり点線で囲んだ。

成田中図と仏中図だけを対比すると、上記の他に傍線を付した部分が成田中図では洩れている。村名21ヶ、郡界6ヶ、地名4ヶ、城下の表示1ヶ、神祠1ヶで計33ヶ所となる。この地区は成田中図では洩れの多い部分で、すべてがそうではないが、仏の中図に比し可成りの差がみられる。

以上簡単な比較であるが、記入項目でみる限り仏の中図は東博中図と同等又は以上と考えられる。



図1 (仏) ペイレ中図 中部 全図

接合記号のコンパスローゼは、色は違うが位置は東博中図とおなじである



図2 (仏) ベイレ中図 部分図 淡路島



(仏) イブ・ペイレ氏蔵 伊能中図 部分 伊豆

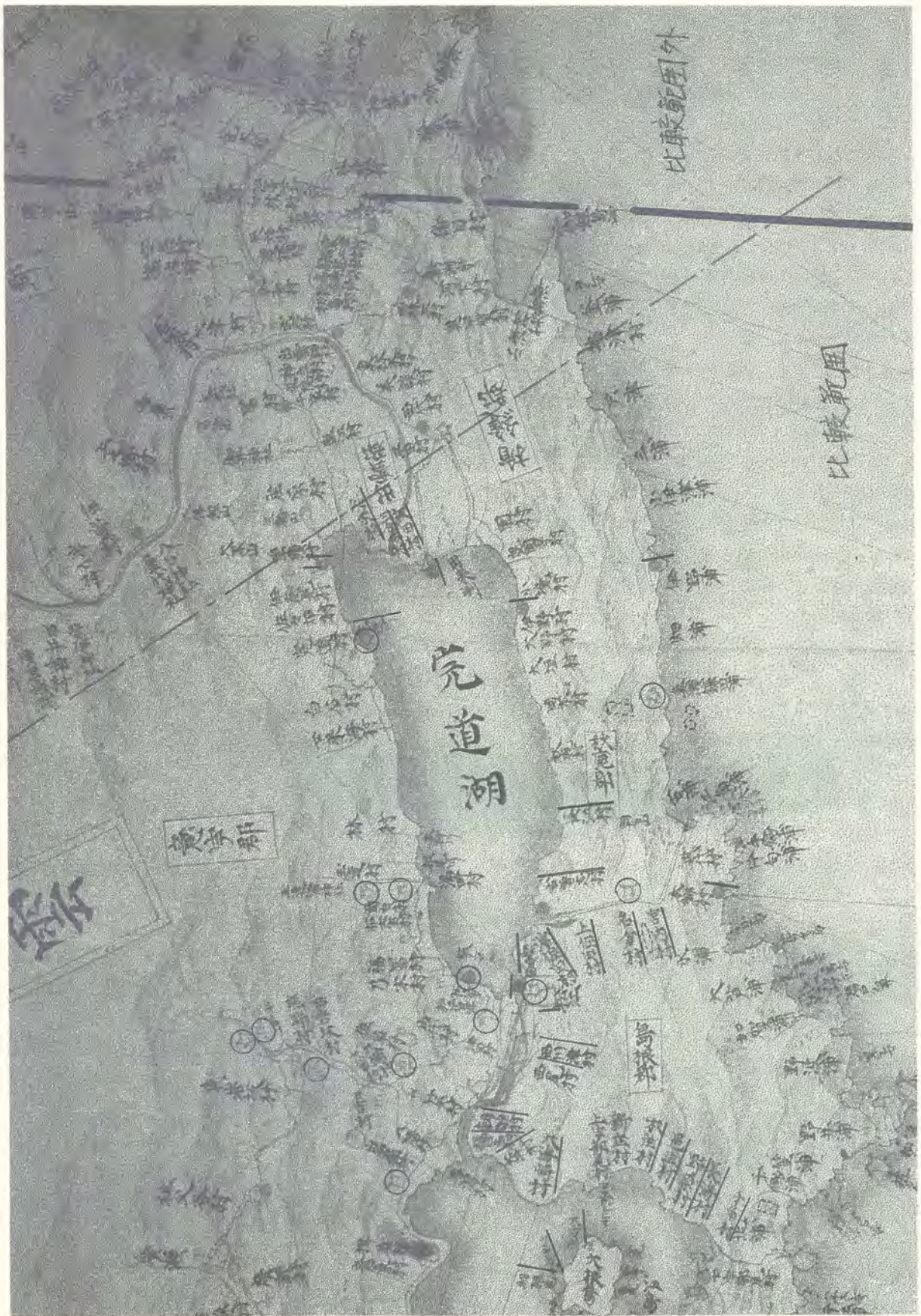


図3 (仏) ペイレ中図と東博中図・成田中図比較

伊能中図の発見

ペイレ氏の中図はどうしてフランスに渡ったのであろうか。発見された家を母から相続したニコルさんの話を聞く。

発見された場所は、le village s'appelle Moutiers Saint Jean というブルゴーニュの近くの300人位の小さな村の民家の屋根裏である。この家はイブさんの奥さんのNicoleさんが母親から生前贈与されたもの。母親は祖母から1/3を相続し、2人の異母弟から相続分2/3を1957年に買取って所有していた。祖母の相続人は母一人であった。母からの生前贈与は1970年であったが、

母の生前は家に手を加えるのをいやがったので、そのままにしていた。1978年に母が死亡したので、改装のため屋根裏を整理して伊能図を発見した。Nicoleさんは1人っ子。ちなみに、NicoleさんとYvesさんの結婚は1957年とのこと。

母の名前は Cecile Curey (1927年結婚)。祖父の名は ^{ニコル ロワイエット} Nicole Royet, 蹄鉄工であった。

この民家の門扉に1848年建築と記されている。最初の所有者は公証人。2代目は獣医。3代目の所有者が祖父の蹄鉄工であったという。主屋と付属棟があり、付属棟は公証人時代には書類を格納するため鉄格子があった。獣医になってから馬具などが納められた。

ニコルペイレさんと昼食を共にしながら、何等かの仮説をと思い、色々質問するのだが、伊能中図との接点はなかなか出て来ない。

屋根裏の整理は、小さな部屋を大きな部屋にまとめるために行ったもの。この家には今でも2週間に1度位はゆく。日本人と結婚した息子のジャン ペイレはそこで式をあげた。結婚式の写真など見せてもらった。



伊能中図が発見された家（裏側） '75.4.29



伊能中図が発見された家（外側） '80.2

イブさんが村の役場にも照会したが、これ以上のことは判らなかった。村長とは懇意である。

蹄鉄工の祖父の没年は1934年で、家は母に相続され、ニコルさんに受け継がれた。祖父は妻の病没に伴い3回結婚した。母は最初の妻（祖母）の子で、2番目の妻には2人子供がおり、3番目の妻には子がなかった。2人の異母弟の相続分を買取った。祖父がこの家を買ったのは1905年。母は買った家の隣りの家で1904年に生まれた。

フランスの伊能図撮影紀行

3月27日9:30AM。宿舎のメリディアン・エトアールに打合どおりイブ・ペイレ氏が迎えに現れる。車内に嫁にいった娘のマリアヌさんも待っていた。小雨のなかをパリの混雑を抜け高速道路を南下する。発見の経緯伝来などについて、通訳の荒井君を介してQ&Aを始める。

40分余りで、イブさんの自宅につく。田舎の部落で商店街などはない。塀のくぐりを入れて左側に住居。奥の方に庭もある。1700年代に作られたもので、1部に1200年代の部分もあるという。屋根の綾線が波を打っているが、モネの絵に出てくような田舎家であった。イブさんの好みだという。

リビングでお茶を頂いてから、くぐり扉を共用する隣家の部屋を借りて調査と撮影。地図サイズの計測、測線を測量原図から写した針穴の有無の確認、描図状況、破損、汚れ、虫食い等のチェックをおこなう。撮影は大型家具の前面に地図を張り止めて行なった。娘のマリアヌは東京に来たとき、勸地図センタの金窪氏のところに、伊能図の部分写真を持参した人で、熱心に質問をした。食事しながら手渡した「伊能図探究 No.2」と、これ迄の自分の調査により、伊能図のなかのイブペイレ中図の位置づけなどを細かく聞かれた。マリアヌさんは英文によるイブペイレ中図のレポートを作っており、91年2月6日の日経夕刊の記事は、ほぼこのレポートに沿ったものである。彼女は今は離れているが、かつてラジオフランスの記者であった。熱心な質問に「ニュースになるのか」と聞いたら、「フランスではニュースにならない」と返ってきた。

撮影は、6×7のブローニー判による各図の全面撮影、35mmカメラによる部分拡大、ビデオカメラによる各部収録を行った。2m以上の大型地図をセットするのは大変だ。イブさん、通訳さん、助手の家内と4人がかりで、テープで止めたクリップを四方から挟んで平面を出し、地図面が画面一杯になるようカメラを据えつける。距離を測ってピントを合わせる。ライトは持参できなかったで、フラッシュ撮影とした。露出を多めに心掛け、何段階にもセットしたが結果的には露出不足だった。地図撮影に増感現像は必須のようである。反面、ビデオカメラは感度が最もよく、イブさんの小さなライトで充分鮮明な画像を得ることが出来た。調査と撮影の作業では、1日に中図4枚を行うのに汗びっしょりで、満2日を要した。



イブさん家と記念撮影

右からイブさん、マリアヌさん、筆者、家内



ペイレ氏宅 モネの絵に出てくるような感じ

帰りは電車を利用した。イブさん宅からのどかな田園風景のなかを徒歩約15分で駅につく。SNCF line の駅で、切符売場のプレハブが少し離れた処にあり老婦人が発券する。改札はなくて自分で記録器により日時を刻印する。この電車はパリのC線に乗入れセーヌ沿いの地下を走る。セーヌを鉄橋で渡りホテルのすぐ近くのポートマイヨーに着いた。約40分であった。

イブペイレ Yves Peyre 氏1家の横顔

イブさんは1934年5月生れで61才。妻のニコルさんは1934年4月生まれの61才。1ヶ月の姉さん女房である。ニコルさんは高校の生物の先生だったが、2年前に停年退職し、今はボランティア活動をしている。陽気なフランス人で元気よく、オシャベリが始まると止まらない。通訳が大変である。

イブさんはグランゼコールの国立高等農業学校の教授で、専攻は土壌学。科学博士。グランゼコールは卒業すると修士の資格がもらえるという。一般には先生の停年は60才だが、イブさんは若いころ、カレッジ・ド・フランスの先生をしていたが正式な教授になっていなかったの2年間を加算して62才が停年になっているそうで、現在も現役である。

長男は医学者。長男の妻は生物学の専門家。二男は中世の建築史が専門で、修復もおこなう建築家。奥さんはスペイン人。三男のジャン・バプティスト・ペイレさん(27才)は目下、日本の都立大学大学院に東京都の給費留学生として在学中で、遺伝子の研究をしている。今回の伊能図調査にあたっては、父親との連絡役を果たしてくれた。奥さんの吉田泉さんは慶応大学の出身で東京海上に勤めていたが、イブさん宅に逗留中にジャンと知り合って結婚した。

イブさん一家と日本のかゝわりについては面白い話がある。一番下はマリアンヌだが、小さいとき交通事故にあって足に怪我をした。裁判して補償金をとり、それを持って長兄の処へ療養に出かけた。兄も面倒をみきれなくなってオーストラリアへ転地する。そこで日本人を含めた外国人と付合う。10代の頃である。多くの友達が出来たがそのなかに吉田泉さんがいた。泉さんがパリに泊まりに来てイブさんの家に滞在しジャンと知り合い結婚した。

伊能図を発見したとき、ジャンは小さかったので関係がない。伊能図が先で、ジャンはあとの話である。

● 忠敬のナゾに挑む

「なぜフランスにあるのか。手がかりはなく、仮説も立てられません」。伊能忠敬が残した日本地図を追ってフランスを訪れた伊能図探究会主宰の渡辺一郎さん(左)が、ため息をついている。

気になる

この人



た。ペイレ氏が二十年前に発見して、日本の国土地理院に写真を送ったため、その存在が知られたが、現物の存在が確かめられた専門家は渡辺さんが初めて。

「中国の八枚そろいは日本でも成田山仏教図書館、東京国立博物館など四方所だけ。イブさんの保存状態も良く、東博のものより古いかもしれません」

まずまず伝来が気になるが、ニコル夫人の実家の屋根裏から発見され、家の所有者は先代が跡継ぎ(ていつ)エ、その前が獣医、三代前が公証人だったというだけ。ナゾは簡単には解けそうにない。(パリ支局)

朝日新聞 95.4.6 夕刊 3面

編集後記

フランスの伊能中図調査の報告をお送りします。該図は想像していたよりも遙かに状態のよい中図だった。伊能図がフランスに渡った経過は推理を働かせ、仮説を検討してゆくしかないが、今後については我々がドラマを描くことが出来る。一時的になりと日本で関係者に見てもらふチャンスをつくる事が出来れば大変幸いだと思っている。

伊能図探究 No. 4

発行 平成7年6月1日

編集発行 伊能日本図探究会 代表 渡辺 一郎

撮影協力 小山 弥雄

所在地 東京都文京区本郷1-27-8-A1007

TEL&FAX 03-3818-0792

(昼間 TEL 03-5261-1801 FAX 03-5261-1803)

© 1995 Ichiro Watanabe